

【海外留学レポート】

# クウェート政府奨学金留学から見る中東と世界

## -中立のクウェート-

The Arab and International Relationships from Kuwait Government  
Scholarship: “The Mediator”-Kuwait

2015-16年クウェート政府奨学金留学生 齊藤 祐史

SAITO Yushi

(2015-16 Kuwait government scholarship student)

キーワード：クウェート、政府奨学金、中東、外交

### はじめに

「クウェート」と聞くと「石油産油国」「クウェート侵攻」「砂漠」などが一般的に思い浮かぶと思われる。学生も同様の認識であることは間違いないが、一つ異なるのが留学先の選択肢として真っ先に考える国でもあることだ。クウェートは、クウェート大学に無償でアラビア語の学習のために留学できるクウェート政府奨学金留学プログラムを、少なくとも32カ国以上に提供している。欧米諸国に引けを取らない国際的な環境に加え、政府の奨学金で無償でアラビア語を勉強できる環境は、クウェート政府奨学金留学のほかにはない。

このプログラムをクウェート政府が提供している背景には湾岸石油産油国としての経済的豊かさとともに、クウェートのこれまでの歴史的背景に基づく外交スタンスが見受けられる。その点も踏まえたうえで、本稿ではクウェート政府奨学金留学プログラムを通じて見えた中東、国際社会の姿を紹介する。そして最後にクウェート留学を通じて得た知見をもとに行っている筆者自身の活動を紹介する。

### クウェート留学概要と留学に至った背景

クウェート政府奨学金留学は1年間クウェート大学の言語センターで正則アラビア語を学習するプログラムである。授業料は無料で、奨学金として往復渡航費、寮、1日3食の食事、月額約4万円、学期ごとに約2万円が支給される。日本人は在クウェート日本国大使館が行なう留学選考に通過した5名が本政府奨学金留学プログラムに参加できる。クウェートは中東の他国と比較しても国内情勢は

安定しているため、治安面も問題なく過ごせる国であることからここ数年で留学志望者が増加傾向にある。

私が留学した2015年は、イスラーム国がシリアとイラクにおいて建国宣言をした翌年であり、加えて5月にはクウェート国内のシーア派モスクが爆破された年であった。中東としてもクウェートとしても非常に緊迫していた年であった。それでも留学を志望したのは、中東・イスラームについて自分の目で確かめたいという思いがあったからである。日本国内では、中東と言えば9.11から変わらず「危険」「テロリスト」にだけ目が向けられてきた。一方でイスラーム教は「平和の宗教」とも呼ばれることがある。では実際イスラームはどんな宗教なのか、現地の人たちはどのように考えているのか、そしてイラクによるクウェート侵攻も体験した現地の人々は現在どのように考えているのか、自身の目で確かめたいと思い、選考に通過して留学に至った。

### クウェート留学生の立場

クウェート留学生はある意味特殊な立場の人間としてクウェートに行くこととなる。留学はクウェート政府の奨学金による留学なので、日本—クウェート間の外交と深く結びつく。そのため、困ったときには在クウェート日本国大使館のサポートも必要に応じて受け、時には日本文化紹介などの大使館のイベントにも参加することになる。

クウェートは政府が石油を保有しており、その経済的豊かさは、社会保障としてクウェート人に還元されている。実際、クウェート人の9割は公務員で、平均年収は1000万円を超えとも言われている。一方で生活を支えているのは、インド人やバングラデシュ人、フィリピン人などの出稼ぎ労働者で、生活水準に大きな差がある。その中でクウェート留学生は外交上守られた立場として生活することになる。留学生は医療を無料、もしくは格安(約400円程度)で受けられ、バスにも無料で乗れる。クウェートという社会を客観視しながらも、自身は守られている側の立場でクウェート留学生を送ることになる。そのため、学内やイベント等で必然と関わりをもつのはやはり各国の留学生とクウェート人になるため、留学生としての視点とクウェート人としての視点で物事を見る機会が多くなる。

### 授業と留学生との交流

クウェート大学で学習する留学生の国籍は、インドネシアやマレーシア、アフガニスタン、タジキスタン、キルギスタン、トルコ、イラン、ロシア、ウクライナ、チェコ、フランス、イギリス、韓国、中国、台湾、ナイジェリア、アルメニア、スペイン、イタリアなど、非常に様々である。そのため、授業内容によっては議論が白熱することがしばしばある。

例えば、死刑についての議論で国家間の違いが顕著に現れた。欧米諸国の学生は死刑反対派がほとんどであったが、イスラーム諸国の学生の場合、現在は各国異なるが歴史的には死刑はイスラーム法上普通に存在した（今も存在している国もある）ため、歴史的背景からなのか賛成派が多かった。



クウェート留学生の集合写真、最後列右端が筆者

また、当時はイスラーム国が台頭していた時期であったため、イスラーム国についての意見の違いも大きく見られた。イスラーム国家からきている留学生と教授の間では、イスラーム国の活動がイスラームに起因するものかどうかという議論が繰り広げられた。支持はしないまでも、ムスリムとしての行為としてはあり得るという見方もあれば、そうではないという考えもあった。イスラーム国がイスラーム法での統治を志し、アブーバクル＝アルバグダーディーが預言者の代理人「カリフ」を名乗った以上、ムスリムにとっては「イスラーム国＝テロリスト」といった単純な話ではないことは確かである。中東関連ではその他にも、シリア問題、パレスチナ問題など、議論は尽きなかった。

イスラームに関する見解は、ムスリム個人によって大きく異なることが多い。マレーシアの学生にイスラーム法学派や、スンナ派とシーア派について尋ねてみたところ、スンナ派の法学派は同じ立場にあるが、シーア派は全く異質なものでイスラームではないと述べていた。クウェート人に聞いてみると、あくまでイスラームという同じ宗教であって、スンナ派もシーア派もイスラームであることに変わりはない。自身もどちらか選択しているわけではないと述べていた。この見解の相違に関しては飲食も同様で、ハラール肉しか食べないと言う人もいれば、啓典の民（ユダヤ教、キリスト教）に許された食べ物は問題ないので欧米諸国ではハラールを気にしないと言う人もいた。フランスからの改宗ムスリムの留学生は、非常にまじめであるが、交流のために必要に迫られる場合はワインを飲むこと

もあるし、母が作ってくれた料理やもてなしで出して頂いた料理はたとえ豚肉が入っていようととも食べると述べていた。イスラームももちろん大切ではあるが、マナーを重んじることも同等に大切にしているようであった。

日本では「中東」や「イスラーム」、「ムスリム対応」と一括りにされがちであるが、国際社会が多種多様な人々で構成されているように、中東、イスラーム世界も多種多様な人々で構成されているのである。これから日本が、「おもてなし」としてムスリム観光客に対応しようとするのであれば、「ムスリム対応」「ハラール対応」と一括りに考えるのではなく、個人個人が観光しやすいように対応していくことが必要になることは確かであると感じる。

### クウェートの外交上の立場

国家としてのクウェートに関しては、外交上非常に顕著な特徴がみられる。それは「仲介者」としてのポジションである。1990年にイラクのクウェート侵攻があったことから、周りに敵を作らない外交を継続している。実際、私が留学していた2016年の1月にサウジアラビアとイランが対立し、国交を断絶した。これに続いてバーレーン、スーダン、ジブチも国交断絶をしたが、クウェートはあくまで大使召還に留めた。これは隣国サウジアラビアに配慮しつつも、イランにも国交を維持するために配慮した一時的な召還であったと言える。その後2017年にはイランとサウジアラビアの仲介に入っている。また、カタールがサウジアラビアと断交した際にも仲介を行っている。そのような外交的態度を見ると、クウェート政府奨学金留学も、周りに敵を作らず、友好関係を維持することで味方を増やための外交手段だと考えられる。

あまり知られていないが、日本とクウェートは外交上非常に良好な関係を築いている。クウェート侵攻があった際に、日本は130億ドルの拠出と自衛隊を派遣しての機雷除去を行っている。日本では当時「金だけか」と言われていたようだが、クウェート人に話を聞くと支援について感謝されることが多い。そしてクウェート侵攻の際に日本が支援したように、クウェートは東日本大震災に際して400億円相当（震災支援金としては世界最大）の支援を日本にしている。また、福島県いわき市にある「環境水族館アクアマリンふくしま」にも、館長が昔クウェート科学研究所に研究者として在籍していたため、日本政府あてとは別に300万ドルの復興支援金を出している。現地のクウェート人に話を聞いてみると彼らは必ず「原爆」「震災」の話を詳しく知っている。日本と同じように、クウェート侵攻で味わった痛みからその平和を願う。この平和を願う気持ちも平和外交に繋がっているのかもしれない。

### クウェートに見るイスラームの道徳

クウェートは、クウェート独自の文化とイスラーム文化の2種類を有している。この2つの文化は全く異質なものというわけではなく、イスラーム文化をクウェート文化がさらに補強していることも

多い。イスラーム文化としては奉仕やもてなしの精神があるが、それに加えてクウェート人は金銭的、時間的余裕を持ち合わせているため、惜しみなく相手に尽くそう、相手を助けようとする文化がある。実際、私が病院に向かうために炎天下のクウェートを徒歩で歩いていた際に、車を運転していたクウェート人に声を掛けてもらい病院まで送ってもらったことがある。その際に病院の治療費まで手渡してくれた。帰りも別の方に声を掛けられ、大学寮まで送ってもらった。クウェートの友人も同様に、何か困ったことがあるときはいつも助けてくれた。クウェート人と遊びに行く際には、なんと全てクウェート人側が費用を持ってくれる。これもクウェートの文化・慣習なのだという。このようなクウェート人の優しさは、イスラーム文化の困った人に手を差し伸べる精神と、もてなしの精神、そしてクウェート人があわせもつ余裕によるものだと考えられる。もちろんクウェート人の持つその余裕は、待ち合わせ時間に数時間遅れたりなどルーズな面にも繋がっているのだが、日本で忙しく暮らしていた私としては非常に参考になる生き方であった。

イスラーム文化のもつ慈悲の精神は、クウェート侵攻を受けて知った痛みがさらに大きなものになっているのかもしれない。クウェートの友人とクウェート侵攻跡を身に行ったときには、クウェート侵攻の悲惨さを語るのではなく「こんなことが今もシリアで起きているんだ…」と、シリア問題への思いを語っていた。クウェートが中立的な平和外交を心がけているのは、こういった精神的な側面もあるのかもしれない。



クウェート侵攻跡「アル・クレインハウス」

#### まとめ：クウェート留学生としてなすべき使命

クウェート政府奨学金留学は、前述の通り友好関係を維持すること、味方を持つことを意識してい

るのだと考えている。しかしながらそれ以上に、クウェート人のもつ優しさを感じることができる留学であったと個人的には感じている。

私自身もクウェート留学を通して、留学先のクウェート大学の方々、現地クウェート人、在クウェート日本大使館の方々などに大変お世話になった。何かしらの形でこのご恩を返そうと現在は以下の活動を行っている。

まず1つ目は、クウェート留学情報サイト「よしくんマディーナ」である。クウェート留学情報の発信と留学サポートをこのサイトを通して行っている。クウェートや留學生生活に関する情報はあまり知られておらず、留学準備をするにあたって、また現地で生活するにあたって困ることが多い。そのため、留學生生活に関する情報や授業の情報、留学準備方法に関する情報を発信することで留学サポートを行っている。毎年8月には歴代のクウェート留學生が集う「クウェート留學生飲み会」を開催し、新しいクウェート留學生が留学する前に先輩留學生から留学について聞ける場を提供している。

2つ目がアラビア語学習サイト「よしくんマドラサ」である。クウェート留学を目指すにあたっては選考段階でアラビア語力が必要になる。そのためアラビア語を学習する必要があるが、アラビア語は独学が非常に難しい。首都圏ではアラビア語学習塾もあるが、地方の学生の場合はアラビア語学習サイトも本格的なものが少ないので書籍で勉強するほかない状況である。そのような状態なのでまずは初学者に分かりやすいアラビア語のサイトを作ることを決め、随時更新している。

3つ目が中東現地就職できる求人情報サイト「アラブワーカードットコム」である。クウェートに留学した学生から、中東に就職できる求人を探している旨の相談が増えたため、中東に現地就職できる求人を紹介するサイトを立ち上げた。

以上のように、現在はクウェートや中東と関わりたいと思った人を助けることを主眼に置いて活動を行っている。クウェート留学選考の面接では「クウェートと日本の橋渡しになりたい」と選考官の方に伝えた。それを果たせるよう、今後も継続して活動していく予定である。

クウェート政府奨学金留学は、奨学金のみならず、現地の人々との交流を通じて優しさを感じることができる留学である。この経験を社会に活かしていくとともに、今後ますますクウェートや中東と、日本の交流が増えていくと嬉しい限りである。